

『今昔物語集』「鈴鹿本」の加速器質量分析法による¹⁴C年代測定

小田 寛貴¹⁾，中村 俊夫²⁾，古川 路明¹⁾

¹⁾ 名古屋大学理学部化学科

²⁾ 名古屋大学年代測定資料研究センター

1. 試料 — 『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸 — について

<『今昔物語集』について>

歴史的展開の原動力は何ものであるか。歴史的展開の表面において「活躍」するのは、常に、時の権力者とそれに付随する人間達である。しかし、その権力者層に表面的「活躍」を促す存在は、彼らの対極に位置づけられた”民衆”と呼ばれる人間達である。”民衆”も”歴史”と同様、その定義は困難なものであるが、その特徴については、以下のように述べることができる。すなわち、「民衆とは、「富」なる者から「貧」なる者としての差別を受け、かつ、「聖」なる者から「賤・穢」なる者としての差別を受ける、つまり、二元的な差別を受ける者から構成された人間集団を指すものである。「貧」、「富」とは、財産の量によって生じる階層である。一方、「聖」、「賤・穢」とは支配者の制定する制度によって形成される身分である。古代日本の「律令」制においては、良民・賤民の区分があったが、良民＝「聖」、賤民＝「賤・穢」という構造は成立しない。制度的には良民の範疇にはいる「公民」は、元来、支配者大王の所有物という意味を持っており、これは「一見極めて明白にして」、民衆の、すなわち「賤・穢」の範疇にはいるものである。また、良民には、特定の手工芸品・サービスを生産する専門的技術者集団である「雑色人」と呼ばれる身分があり、「公民」の下に位置づけられていた。これなども、やはり「賤・穢」の範疇にはいるものである。現在に至るまで、日本の支配形態は本質的には、この古代「律令」制によってつくられた形態から変貌していないといえよう。「公民」、「雑色人」、「賤民」から成る「賤・穢」という身分は、ほとんどの部分で「貧」という階層と一致して、民衆を形成する。そして、この「貧」かつ「賤・穢」なる民衆が原動力となり歴史を展開させてゆくことになる。名主（旧 田堵（旧 部民））と作人（旧 下人・所従（旧 寄口・家人・私奴婢））とによって経済的圧迫を受けた荘官＝郡司（旧 国造）が、自身の荘園の寄進先を藤原摂関家、院、平氏、源氏と変遷させたのに対応して、中央の政治形態が摂関政治、院政、平氏政権、鎌倉幕府と変遷したのは、その例の一つである。もっとも、荘園制については、国司（受領）層の郡司（荘官）層への圧迫という中央の中流貴族からのフィードバック効果も無視できない。

さて、歴史的展開の原動力が民衆にあるにもかかわらず、古文書として残る記述には、民衆について述べられたものが少ない。述べられているものにしても、支配者階級と関わりのある部分として扱われていることが多く、民衆の行為、行動そのものを

主体としたものとなると、その数はやはり少ない。

平安時代中・後期は、江戸時代に先行して鎖国政策が採られた時期である。むしろ、江戸時代の「鎖国」が、貿易の一切を禁ずるものではなく、貿易相手国に一定の制限を加えるという一種の海禁政策に過ぎなかったことを考えると、平安時代のそれこそ鎖国であったとみることができる。このような状況のもとで、後に「国風文化」と呼ばれるようになる鎖国文化が展開された。「国風文化」は、同時に中央貴族を中心にした文化でもあった。文学においては、音標文字である仮名が登場し、貴族層の手になる和歌が隆盛し、また、物語、日記といった娯楽文学が現れた。この時代の物語の素材は民間伝承にあるとされているが、結果としては貴族の日常を描写したものとなっている。また、宗教においては、弥陀の本願（念仏を唱える者を来世で極楽浄土に往生させるという誓い）を掲げた阿弥陀如来が、末法期の人心をとらえるにいたり、浄土教（阿弥陀如来の信仰）が流行した。彫刻もこの阿弥陀信仰の影響を受けるにいたり、寄木造の阿弥陀如来像が登場した。また、建築においても、阿弥陀堂が姿をあらわした。しかし、平安末期（院政期）になって、貴族層の「国風文化」は藤原撰関家が没落するのに伴い中央での勢いをなくした。院政期の文学には、『大鏡』、『栄華物語』といった藤原撰関家に関する歴史物語の他に、『将門記』、『陸奥話記』といった地方勢力に関する軍記物語が登場した。この意味で、院政期の文化は「国風文化」に地方勢力の要素が加わったものであるといわれる。

この院政期の文化において、他にはみられない文学として、『今昔物語集』がある。『将門記』、『陸奥話記』に地方勢力に関する記述があるといっても、それは、中央貴族との関連なしには存在しない記述でしかない。これに対して、『今昔物語集』にみられる記述は、ある対象（人間）の行為・行動に関する興味から書かれたものであるといえる。そして、その対象となる人物は、「貧・富」という階層、「聖・賤」という身分を問わず広範囲にわたっている。歴史的展開の原動力たる民衆をも含めてその対象としている点で、『今昔物語集』は、他の同時期の文学とは異なるものであるといえることができる。

8世紀初頭に「成立」し、半世紀を経ずして崩壊した律令制は、郡司層の自墾地系荘園経営を促した。国衙領からの収奪を行う郡司と、その郡司からさらに収奪を行う国司の利害対立は、郡司が一方において荘園領主という立場で荘園経営を行うに至って、一層激化した。荘園の増加にともない窮乏化した朝廷財政は、その補填を行うべく、9世紀には勅旨田、官衙領の経営を開始するとともに、経済的負担となる皇族の一部を賜姓皇族として臣下に移すことを頻繁に行った。この賜姓皇族が、後に在地の名主・荘官と結んで武士団を形成することになる。10世紀には名主（旧班田農民）-下人・所従の反抗と国司（受領）の圧迫を受けた郡司（荘園領主）が、自身の荘園の所有権を中央の有力者に寄進し、その代償として荘官職（現地荘園の管理、収奪の委任）を獲得するに至った。この寄進地系荘園の寄進先である中央有力者は、10世紀の段階では専ら藤原撰関家である。このため、中央の政界は、寄進地系荘園を経済基

盤に持つ藤原摂関家によって掌握された。窮乏化の進んだ国家財政は、荘園整理令を濫発するが、天皇の外戚である藤原摂関家の荘園に対しては効果をあげることはできなかった。しかし、藤原摂関家と外戚関係を持たない後三条が行った延久の荘園整理令（1069年）においては、藤原摂関家の荘園が、その「特権」を失うことになった。また一方においては、治田（名主の開墾地）を基盤にして、名主がその経済的地位を向上させ、荘官に対抗し得る勢力となった。さらに、11世紀には名主がその占有権を持つ百姓名が形成されるにいたり、荘官の経済的基盤は下層の名主からも圧迫を受けるに至った。こういった状況の中、荘官層は自身の荘園保護を求めて、寄進先を藤原摂関家から皇室に転向させた。この寄進地系荘園を経済基盤にすることで、院政が実現することになる。郡司（荘官）層が伝統的在地勢力としての優越性に加えて荘園保護を強化しつつある一方で、中間収奪者としての国司（受領）層が、院に対して自身の公的土地支配権の保障を求め、荘園（主に領家職を持つ）を寄進するとともに、その側近である「院の近臣」を形成するにいたる。これにともない、院は、受領・荘官という対立する両者に対して土地支配権の保障を与えることになり、その微妙なバランスの上で、知行国（国衙領）・荘園から得られる成果を収奪し、不安定な支配体制を維持することになる。

名主・作人層、郡司（荘官）層、国司（受領）層という三階級の間には存在する対立のバランスの上に院政は成立した。『今昔物語集』は、このような院政期に書かれたとされる説話集である。説話とは、実在した人物ないしは事象に関わる話が伝承されたものである。

『今昔物語集』は計31巻（現在、巻八、十八、二十一は欠巻）あり、その中に、天竺・震旦・本朝、三国の説話1000余りを収めている（なお、天竺・震旦・本朝とは、現在の国でみると、おのおのインド・中国・日本に近いものである）。また、内容的には、仏教的な教訓について語られる仏教説話と、一般的な教訓について語る、ないしは興味ある出来事をそのまま述べる世俗説話とに分けることができる。その配巻について、簡単に下に記す。

	仏教説話	世俗説話
天竺	巻一～五	—
震旦	巻六～九	巻十
本朝	巻十一～二十	巻二十一～三十一

『今昔物語集』の採用している説話の配列は、連鎖的説話展開法とよばれるものである。連鎖的説話展開法とは、各巻の第一話から巻末話まで二話ずつ内容の類似したものを並べ、かつ、次の二話との間にも何らかの関連をもたせるという配列方式である。

前述したように、一世代前の「国風文化」文学が、貴族層のみを対象としているの

に対して、『今昔物語集』の対象は、広範囲の身分・階層にわたっている。また、「国風文化」文学の筆者の多くが貴族層から出ているのに対して、『今昔物語集』の筆者には、事務系統の僧侶（別当）などが推定されている。かつて、『今昔物語集』の作者には源隆国が当てられていた。しかし、隆国が没した後の記述も『今昔物語集』の原本にあったとされることから、現在では隆国を作者とする説は否定されている（例えば、馬淵 1948）。『今昔物語集』の作者については、その条件として、

1. 貴族的・官僚的社会の中に、その日常生活基盤を持たないこと
2. 実務的な学問を身につけていたこと
3. 仏教教学は、常識の範囲にとどまり深い哲理に達したものではなかったこと
4. 典籍類を自由に読むことができたこと
5. 時間的余裕と、紙・墨・筆など物質的な余裕があったこと

などが挙げられている（今野 1958）。しかし、『今昔物語集』の作者に関わる論争には、未だに結論が出されていない。

<「鈴鹿本」について>

1991年10月8日、『今昔物語集』「鈴鹿本」全九冊が、所蔵者であった鈴鹿紀氏から京都大学付属図書館に寄贈された。「鈴鹿本」は蠹損が甚だしく、破損する恐れがあったため、その閲覧は、はばかれていた。しかし、京都大学付属図書館に寄贈されたのを機に、1991年度から1993年度にかけて「鈴鹿本」の修補が行われた。現在、「鈴鹿本」は、京都大学付属図書館貴重書庫に保管されている。

「鈴鹿本」は、現存する『今昔物語集』としては最古の写本であり、かつ、現存諸写本をしたがえる祖本であるといわれている。『今昔物語集』の伝本間の関係は、（馬淵 1951）に詳しく記されている。これをみると、『今昔物語集』は、内閣文庫とされているものもいくつかあるが、ほとんどが大学等の図書館に所蔵されており比較的閲覧しやすい状態にあるといえることができる。

「鈴鹿本」が現存諸写本の祖本にあたることは、以下のようにして明らかにされた（馬淵 1948：馬淵 1951）。『今昔物語集』の説話では、話の途中に多くの空白（欠文）がある。この欠文には、原本の作者が意識的に空白とした意識的欠文と、祖本に生じた蠹損・破損がその写本に欠文として現れる無意識的欠文とがある。諸写本には無意識的欠文として現れている部分が、「鈴鹿本」では蠹損・破損の穴となっている。このことをもって、「鈴鹿本」は原存諸写本の祖本とされている。また、江戸時代（天保）の国学者である伴信友は「十二卷奈良木批校之間事」において、既に「鈴鹿本（奈良本）」が全存諸本の祖本であることを述べている。

○ 奈良人某ノ蔵テル古本ノ今昔物語集第十二卷一冊ヲ見ル或人ノ計ラヒテタゞ二日

ヲ限リテ借ル事ヲ得テ校合セリサテ其奈良本（中略）通校スルニ今ノ写本ハモト
此奈良本ヲ写タルモノニテ其ヲ次々ニ転写セルモノトミユ其証ハ下ニ云フヘシ
（中略）奈良本折口ノ方イタク蠹損シテ字ヲ失ヘル処多シ写本ニ字ヲ欠タル処悉
其蠹損ノ処ナリコレ今ノ写本スナハチ此奈良本ヲ以テ写セル証トスベシ

伴信友は1833年（天保4年）、奈良において『今昔物語集』「奈良本」巻十二と遭遇し、二日間を限ってこれを借り、自身の写本と校合した。「十二卷奈良本批校之間事」は、その際に伴信友が自本の巻末に附載したものである。それが、長沢伴雄の写本（1836年（天保7年）6月に伴信友写本を書写したもの：東大図書館蔵）に転写されており、その研究から、「奈良本」は「鈴鹿本」と同一のものであるとされた（長野1962）。その後、信友校合本（小浜市立図書館酒井家文庫蔵）の調査が行われ、「奈良本」＝「鈴鹿本」が改めて確認された（酒井1975）。

本実験の目的については次項において述べるが、その一つは「鈴鹿本」の書写年代の決定である。文献史学の面からは書写奥書がないため、その年代は明確にはわかっていないが、伴信友は、「十二卷奈良本批校之間事」において、以下のような推定を行っている。

サテ奈良本奥書モアラザレバ何ノ世ニ書タルニカ知ル由ナシ予既ニ見タリケル他
ノ古写本共ニ准ヘオモフニ六七百年前ノ書ナラムカ

これからすると、「鈴鹿本」は12～13世紀（院政期から鎌倉初期）の写本となる。また、近年の報文においては、1446年（文安三年）の写本とする説も挙がっている（田口1978）。しかしながら一般的には、鎌倉中期の写本として議論をすすめることが多いようである（例えば、平林1978）。

伴信友は、奈良において「鈴鹿本（奈良本）」巻十二に遭遇した11年後（1844年：天保15年）、京都において「鈴鹿本」を見ている。これは、鈴鹿連胤の収集したものであり、先にみた巻十二の他に巻二十七、二十九、ならびに天竺震旦の部数巻を確認している。信友は、このことを「追記」として、「十二卷奈良本批校之間事」の後に記載している。

天保十五年三月京ニアリテ鈴鹿筑前守連胤ノ近頃奈良ヨリ購得タリトテ秘蔵ル此
物語集ノ古写本ノ闕卷ヲ乞得テ見ルニ本朝部第十二第廿七第廿九ノ卷三冊アリ
（中略）サテ又鈴鹿氏此外ニ天竺震旦ノ部若干卷蔵リト聞タレドモトヨリ其本書
ヲダニ省キテ写シ持タザレバ借りテモ見ズ

この段階では、本朝の部三冊と天竺震旦の部数冊であったが、その後、鈴鹿氏によってさらに何冊かが集められ、現在の全九冊となったと考えられる。

<測定試料について>

前項において述べたように、『今昔物語集』「鈴鹿本」は、京都大学付属図書館に寄贈されたのを機に修補が開始された。「鈴鹿本」は、美濃紙に書写されたもので、紙捻を用いて袋とじにされていた。本実験で用いた試料は、その修補の際に不必要となった綴じ糸（紙捻）である。本研究の目的は、加速器質量分析法によって綴じ糸の ^{14}C 年代を測定することで、「鈴鹿本」が書写された年代、および、過去に行われた修補の年代について自然科学的な情報を得るところにある。

試料である綴じ糸は、計10点あり、1992年度までに修補を終えた巻二、五、七、九、二十七の各位置から採取したものである。その詳細は表1に示した。

2. 試料調製

試料は2～5 cmの紙捻である。その初期重量は他の重量値とともに表1に示した。年代測定に供する試料は、後世の不純物を含んでいるため次のような洗浄を行った。各洗浄の条件をつぎに示す。

・ H_2O	(室温で超音波洗浄)	約20分毎に H_2O を交換	計3時間
・ 0.6N HCl	(50～60℃)	約3時間毎に溶液を交換	計15時間
・ 0.6N NaOH	(50～60℃)	約3時間毎に溶液を交換	計18時間
・ 0.6N HCl	(50～60℃)	約3時間毎に溶液を交換	計18時間
・ H_2O	(50～60℃)	約2時間毎に H_2O を交換	計12時間

試料No. 5, 9には墨とおもわれる付着物があったが、これは洗浄後も除去されなかった。しかしながら、墨についても、紙と同時代の植物・動物から生産されたものであるため、年代値に変化を及ぼすことはないと考えられる。

乾燥は、シリカゲルを入れた真空デシケーター中で3日間行った。乾燥後の重量は表1に示した。

洗浄後の試料から、グラファイトターゲットを調製した。また、ここでは $\delta^{13}\text{C}$ 値測定のための CO_2 も同時に調製した。

試料(3～7 mgの紙捻)を酸化銅(II) 700～800 mgとともに、あらかじめ1000℃で焼き出ししておいた9 mmφ×300 mmのバイコール管につめ、真空ラインに接続、4 mtorr程度まで排気したのちに封管した。これを、電気炉(950℃)で約2時間加熱することで、試料を二酸化炭素とした。

加熱後のバイコール管を、二酸化炭素精製用の真空ラインに接続し、 CO_2 の精製を行った。真空ラインに導入した試料ガスから、融点にあるエタノール(m.p. -114.1℃)

でH₂Oを、ペンタン (m. p. -129.72°C) でSO₂などの不純ガスを分離した。精製されたCO₂を、トランスデューサーで定量したのち、二本の6mmφパイレックス管に分けて捕集した。このうち、一本は、以下のグラファイト化の操作に供してターゲットとした。また一本は、 $\delta^{13}\text{C}$ 値測定の試料とした(各々の量も、表1に記した)。

ここで、標準体(NBS シュウ酸 SRM-4990:通称 OLD シュウ酸)のCO₂化について述べる。おおむね、試料のCO₂化と変わりはないが、ガス化する際の条件を450°Cで2時間加熱とした。また、H₂O以外に不純ガスが無いため、精製の際にペンタントラップを用いる操作は行っていない。

次に、試料および標準体から調製したCO₂をグラファイト化の操作に供した。グラファイト化は、CO₂をH₂で還元して行われる。この際にFe粉末を触媒として用いる。Fe粉末の表面が酸化されている場合グラファイト化は進行しない。したがって、グラファイト化に先行してFeの再還元を行った。

6mmφ×10mmのバイコールカップにFe粉末を1~2mg入れ、9mmφ×300mmのバイコール管の先端に入れる。これを、真空ラインに接続し4mtorr程度まで排気したのちに、0.5atmのH₂を導入しコックを閉じて封管する。このバイコール管の下部を、電気炉(450°C)で約1時間加熱しFeの再還元を行った。

再還元済みのFe粉末をグラファイト化用の真空ラインに接続し、以下のようにターゲットの調製を行った。CO₂をFe粉末の入ったバイコール管に液体窒素で捕集し、そこにCO₂の2当量に相当するH₂を導入したうえで、封管をした。なお、この際H₂ガスの圧力が1気圧を越えないように、封管する位置の調節を行った。このバイコール管の下部を電気炉(650°C)によって加熱し、1時間程度経過すると管の上部に水滴が凝結し、管下部でグラファイトの生成が始まる。加熱は6時間以上行い、生成したグラファイトを専用の手動圧縮装置を用いて圧縮し、ターゲットを作成した。

表1. 『今昔物語集』「鈴鹿本」の試料調製

試料 No.	巻 (位置)	試料[mg]		CO ₂ [mgC](炭素としての重量)	
		初期重量	洗浄後重量	ターゲット用	$\delta^{13}\text{C}$ 測定用
1	二(上)	41.2	32.4	1.38	0.35
2	二(中)	54.2	35.4	1.46	1.32
3	二(下)	56.8	40.7	1.63	1.49
4	五(上)	60.8	46.7	1.44	0.36
5	七(中)	57.0	35.7	1.56	1.40
6	九(上隅)	10.2	6.3	0.77	0.61
7	九(上)	70.3	42.5	1.49	0.36
8	九(下隅)	16.2	11.2	1.04	0.84
9	二十七	59.7	39.6	1.42	1.22
10	二十七	24.1	14.6	1.30	0.95

3. 測定および測定結果

調製したグラフィットターゲットを名古屋大学タンデロン加速器質量分析計での測定に供し、試料の $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ と OLD シュウ酸の $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ の比 $R \pm \Delta R$ を得た。また、トリプルコレクター式気体用質量分析計 (Finnigan MAT 社製 MAT-252) によって $\delta^{13}\text{C}$ 値の測定を行い同位体分別効果に対する補正を行った。同補正には、放射線計数法に準じた補正法を採用した。すなわち、 ^{14}C 年代 t [yBP] は、

$$t = -1 / \lambda_{L1} \times \ln (R \cdot E \cdot F / f)$$

として与えた。ただし、 λ_{L1} は Libby 半減期に基づく壊変定数、 E は $^{12}\text{C}-^{13}\text{C}$ 換算項、 F は同位体分別効果に対する補正項、 f は標準体固有の係数であり、

$$\lambda_{L1} = \ln 2 / 5568 [\text{y}^{-1}]$$

$$R = (^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_{\text{sa}} / (^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_{\text{od}}$$

$$E = (1 + \delta^{13}\text{C}_{\text{sa}}/1000) / (1 + \delta^{13}\text{C}_{\text{od}}/1000)$$

$$F = (1 - 2(25 + \delta^{13}\text{C}_{\text{sa}})/1000) / (1 - 2(19 + \delta^{13}\text{C}_{\text{od}})/1000)$$

$$f = 0.95$$

として与えられる。なお、添字 sa, od はおのおの試料、OLD シュウ酸を示すものである。測定結果を表 2 にまとめる。

表 2. 『今昔物語集』 「鈴鹿本」 綴じ糸 ^{14}C 年代測定結果

試料 No.	R	$\delta^{13}\text{C}_{\text{sa}}$ [%]	$\delta^{13}\text{C}_{\text{od}}$ [%]	^{14}C 年代 t [yBP]
1	0.9367 ± 0.0061	-25.43 ± 0.06	-18.90 ± 0.06	158 ± 53
2	0.9178 ± 0.0059	-25.64 ± 0.06	-18.73 ± 0.06	319 ± 52
3	0.9319 ± 0.0071	-25.24 ± 0.06	-18.60 ± 0.06	198 ± 61
4	0.9217 ± 0.0052	-25.83 ± 0.06	-18.92 ± 0.06	285 ± 45
5	0.9086 ± 0.0079	-25.74 ± 0.06	-18.84 ± 0.06	400 ± 70
6	0.8772 ± 0.0042	-26.10 ± 0.06	-18.89 ± 0.06	680 ± 39
7	0.8551 ± 0.0042	-26.02 ± 0.06	-18.89 ± 0.06	886 ± 40
8	0.8463 ± 0.0050	-26.08 ± 0.06	-18.80 ± 0.06	968 ± 48
9	0.9358 ± 0.0086	-24.91 ± 0.06	-18.83 ± 0.06	170 ± 73
10	0.9313 ± 0.0059	-25.62 ± 0.06	-18.77 ± 0.06	202 ± 51

4. 考察

<『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の暦年代較正>

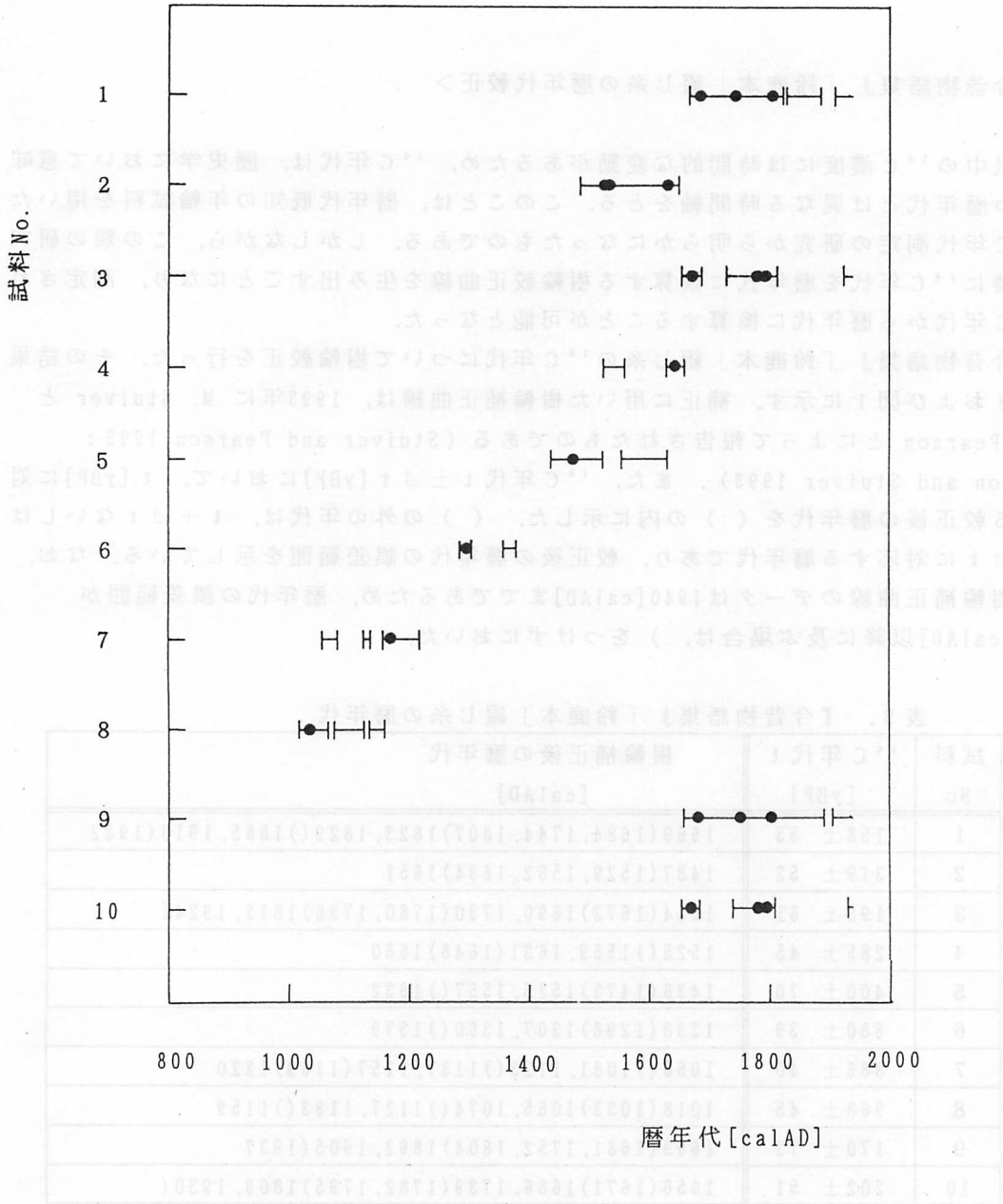
大気中の¹⁴C濃度には時間的な変動があるため、¹⁴C年代は、歴史学において意味を持つ暦年代とは異なる時間軸をとる。このことは、暦年代既知の年輪試料を用いたの¹⁴C年代測定の研究から明らかになったものである。しかしながら、この類の研究は同時に¹⁴C年代を暦年代に換算する樹輪較正曲線を生み出すことになり、測定された¹⁴C年代から暦年代に換算することが可能となった。

『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の¹⁴C年代について樹輪較正を行った。その結果を表3および図1に示す。補正に用いた樹輪補正曲線は、1993年に M. Stuiver と G. W. Pearson とによって報告されたものである (Stuiver and Pearson 1993: Pearson and Stuiver 1993)。また、¹⁴C年代 $t \pm \Delta t$ [yBP]において、 t [yBP]に対応する較正後の暦年代を () の内に示した。() の外の年代は、 $t + \Delta t$ ないしは $t - \Delta t$ に対応する暦年代であり、較正後の暦年代の誤差範囲を示している。なお、この樹輪補正曲線のデータは1940[calAD]までであるため、暦年代の誤差範囲が1940[calAD]以降に及ぶ場合は、) をつけずに示した。

表3. 『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の暦年代

試料 No.	¹⁴ C年代 t [yBP]	樹輪補正後の暦年代 [calAD]
1	158 ± 53	1669(1684, 1744, 1807)1823, 1829()1885, 1910(1932
2	319 ± 52	1487(1529, 1532, 1634)1651
3	198 ± 61	1654(1672)1690, 1730(1780, 1796)1813, 1924(
4	285 ± 45	1525()1559, 1631(1646)1660
5	400 ± 70	1438(1473)1525, 1557()1632
6	680 ± 39	1288(1298)1307, 1360()1379
7	886 ± 40	1056()1081, 1123()1137, 1157(1169)1220
8	968 ± 48	1018(1033)1065, 1074()1127, 1133()1159
9	170 ± 73	1659(1681, 1752, 1804)1892, 1905(1937
10	202 ± 51	1656(1671)1686, 1739(1782, 1795)1809, 1930(

図1. 『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の暦年代



『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の暦年代について、これを以下の四つの時代に区分することができる。

- I. 1000~1200[calAD]… 卷九（上）（下隅）
- II. 1300[calAD] … 卷九（上隅）
- III. 1450~1650[calAD]… 卷五（上），卷七（中），卷二（中）
- IV. 1650~1940[calAD]… 卷二（上）（下），卷二十七

<『今昔物語集』「鈴鹿本」の書写年代>

『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の暦年代を四つの時代に区分した。ここでは、その内の最も古い区分 I (1000~1200[calAD]) について議論をすすめる。この範囲にはいる試料は、巻九(上)(試料No. 7)と巻九(下隅)(試料No. 8)である。これらの暦年代を、表3から抜粋し、以下に再度記す。

	¹⁴ C年代[yBP]		樹輪校正後の暦年代[calAD]
No. 7 :	886±40	:	1056()1081, 1123()1137, 1157(1169)1220
No. 8 :	968±48	:	1018(1033)1065, 1074()1127, 1133()1159

「鈴鹿本」が書写された年代については、鎌倉中期という通説がある。しかし、巻九の二つの綴じ糸は、鎌倉中期よりもさらにさかのぼった年代を示している。ただし、両試料が同じ時に使用された綴じ糸か、否かは断言できない。

11~12世紀は、大気中の¹⁴C濃度が時代とともに減少している時期に相当しているため、¹⁴C年代の誤差に比べて校正後の暦年代の誤差が大きくなる。このため、試料No. 7, 8の暦年代が約一世紀半にわたっている。この年代値の下限は、試料No. 7, 8のおおの1220, 1159[yBP]となるが、上限については、文献史学的な情報から制限を加えることができる。『今昔物語集』の一写本である「鈴鹿本」の書写年代については明確にわかっていないが、『今昔物語集』原本の成立年代については、院政期であることがわかっている。さらに、巻二十七第三十七話「狐変大榎木被射殺語」の欠文の研究から、『今昔物語集』の成立年代を保安元年(1120年)から天治二年(1125年)頃に限定することができる(橘 1961)。この話の冒頭部に

今昔。[]ノ比、春日ノ宮司ニテ中臣ノ[]ト云フ者有ケリ。
其レガ甥ニ中大夫[]ト云フ者有ケリ。

という一文がある。この[]で示した欠文は、意識的欠文と呼ばれるもので後で作者が事実に沿って補い得るように空けておいた欠文である。中臣氏の系図等からみて、二番目の欠文部には、「有助」、三番目の欠文部には「有兼」がはいる。これより、最初の欠文部には、永久四年(1116年)から保安三年(1122年)間の年号のいずれかがはいることになる。また、この話の末尾近くに、

此ノ事ハ只此ノ二三年ガ内ノ事ナルベシ。

という一文がある。これより、『今昔物語集』の成立年代を保安元年(1120年)から天治二年(1125年)頃に求めることができる。この事実は、先の¹⁴C年代値の上限に制限を加える。写本である「鈴鹿本」の書写年代は、原本の成立年代をさかのぼらな

いため、試料No. 7, 8の年代値の上限は1120年となる。ここですでに、得られた¹⁴C年代を「鈴鹿本」の書写年代としているが、もちろん、「鈴鹿本」が修補された年代である可能性もある。事実、試料No. 7はNo. 8に比べやや新しい年代を示しており、修補の年代値である可能性もある。しかし、試料No. 8については、それが仮に修補された年代を示しているとしても、書写年代がそれよりもさかのぼることは明かである。このため、1120年を上限とする「鈴鹿本」の書写年代と試料No. 8の年代値との間に大きな差はないと考えることができる。

以上述べたとおり、試料No. 8の結果から、「鈴鹿本」が書写された年代は平氏政権樹立以前の院政期（1120～1160年頃）にあたる。これは、また同時に、「鈴鹿本」が書写されたのは『今昔物語集』原本が成立して間もない頃であることを示している。ここで、原本と「鈴鹿本」の関係について議論すべく、『今昔物語集』原本の成立事情をみしてみる。

『今昔物語集』には、先にみたような意識的欠文が多く含まれている。この種の欠文について、かつては、“作者と同時代の人物に関する話において、何らかの支障があるため空白としておいたものである”といった見解もあったが、現在では、“編纂時に不明瞭であった部分を後に補うために、空白としておいたもの”というのが定説である。各巻において、意識的欠文をもつ話が総話数に占める割合は、平均して3割である。また、題のみあって、本文がないような話も30話近くある。こういった、『今昔物語集』の混乱した形態を考えると、それが未定稿本であったことは明らかである。また、巻一～七において欠文の割合は、他の巻に比べて低い値をとっている。これは、作者が、巻一から巻七までの空白部分の一部を埋めていったためとみることができる。これらから、『今昔物語集』原本の成立事情としては、以下のようなことが考えられている（馬淵 1948）。まず、収集された説話を部類分けしたのち、不明瞭な部分については空白としたままで巻一から巻三十一まで執筆した。この後、空白部分で明らかになったものについて、巻一から書き加えはじめたが、巻七（ないしは巻八）まで来たところで、何らかの事情によって編纂を中止した。この時点における未定稿本が、『今昔物語集』の原本となった。

『今昔物語集』原本は、未定稿本として1120～1125年頃に「成立」した。一方、「鈴鹿本」は、それからまもなく書写され、袋とじの本として成立した。この二つの事柄を考えあわせると、原本が一つの完結した本（ないしはそれに準じるもの）ではなく、未だ何回目かの書き直しの段階にあったとするならば、その最後（編纂中止直前）の段階に相当するものが、「鈴鹿本」となった可能性が出てくる。もっとも、「鈴鹿本」を未定稿本の清書版原本であることにについては推測の域を出ないが、いずれにしても「鈴鹿本」の書写された年代が、従来通説とされていた鎌倉中期をさかのぼり、『今昔物語集』原本成立からそれほど下らない時期に求められることは確かである。

<『今昔物語集』「鈴鹿本」の修補について>

年代測定に用いた試料は、綴じ糸である。書写されてから現在にいたるまで、「鈴鹿本」の修補が行われていたとするならば、得られる年代値は、その修補が行われた年代値を表すことになる。先の年代区分における最も古い区分Ⅰが書写年代を表すことは、既に述べた。このため、そのほかの三つの区分Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（1300、1450～1650、1650～1940[calAD]）は、「鈴鹿本」修補の年代値であるといえる。

前項において述べたように、試料No. 7の年代値も修補年代である可能性があり、また、三つに分けた修補年代も、その中で複数回の修補が行われている可能性がある。したがって、ここでは「鈴鹿本」の修補の回数は、少なくとも3回はあったということが出来る。また、各修補の跡が綴じ糸の年代値として残っていることから、「鈴鹿本」の修補が全巻にわたって行われたものではないことがわかる。

伴信友が天保4年（1833年）に奈良で「奈良本」をみたときは、一冊（巻十二）だけであった。つぎに、信友が鈴鹿連胤から借りた際には、本朝部三冊（巻十二、巻二十七、巻二十九）と天竺震旦部数冊を確認している。そして、京都大学附属図書館に寄贈された際には、計九巻となっている。これを根拠に、「鈴鹿本」は、現在に至るまで、全巻揃って保存されてきたのではなく、各巻ばらばらに保存されてきたといわれている（酒井 1975）。このことは、ある時期の修補が、一部の巻にだけ行われているという結果からも裏付けられるものである。

またさらに、その修補は、手元にあった巻（行動を共にしていた巻）の綴じ糸すべてについて行われたものでもないことがわかる。それは、巻二の三つのデータからいうことができる。巻二（上）（下）の綴じ糸がⅢの時期に綴じ直されているのに対して、巻二（中）の綴じ糸は、Ⅳの時期に修補されたもののままである。おそらく、綴じ糸をすべて取り替えるのではなく、破損したものだけを取り替えるという修補であったと考えることができる。

文献史的な面から、修補が行われた可能性のある時期が指摘できる。それは、「鈴鹿本」の紙端にある書き込みから推定されるものである。これは、総六丸という人物によって、紙端、すなわち本の綴じ込みとなる部分に書かれた五つの書き込みである（酒井 1975）。この書き込みとその所在を次に示す。なお、破線を付した部分は、二行に分けて書かれていたものである。

- | | | | |
|---------------------|-----|----|--------------|
| 一。一見畢 | 総六丸 | 十九 | 卷十第二十八紙左端 |
| 二。一見了 | 総六 | 十九 | 卷十二第四十二紙左端 |
| 三。一見畢 | 総六丸 | | 卷十七第四十三紙左端 |
| 四。此一条ハ尤以コワキ事也可有覚悟へへ | | | 卷二十七第二十二紙右端裏 |

五. 一見畢南井坊内総六丸此比春日太神開門尤

以目出タシ新造屋八月中一日ノサンロウ

卷二十七第四十一紙左端

この書き込みは、信友によって初めて発見された（その際は、五. だけであった）。信友は「追記」の中で、この書き込みは、「鈴鹿本」が書写された際に、「件ノ文マデ書写」したというメモとして書かれたものであると述べている。また、「南井坊」を東大寺のそれとして推定し、「鈴鹿本」が東大寺において書写されたとしている。しかし、近年の研究においては、この書き込みは、書写されたものを校合する際に書かれたものとして考えられている（酒井 1975）。また、「春日太神開門」については、室町時代の文安三年（1446年）の開門であるとされ、「南井坊」には、東大寺ないしは興福寺のそれが推定されている（平林 1978：田口 1978）。

この書き込みについて、三つの見方ができる。一つは、「鈴鹿本」書写後、まだ一枚一枚の紙であったときに、書き込まれたとするものである。二つめの見方では、書写後一枚一枚の紙の状態のまま保管され、1446年にいたって書き込みがなされるとともに、袋とじの本として装丁されたとする。三つめは、「鈴鹿本」は書写後、袋とじの本として保管され、1446年に解体・修補がなされるに至り、その際に書き込みがなされたとするものである。仮に一つめの見解が成り立つとするならば、「鈴鹿本」の書写は、1446年付近となるはずである。しかしながら、前項において述べたとおり、「鈴鹿本」の書写年代は、平安末期にあたる院政期であるため、この見解は成り立たないことになる。二つめの見解が成り立つならば、袋とじ本に用いられた綴じ糸の年代は、室町時代をさかのぼらないはずである。しかし、実際には、綴じ糸の年代は院政期にまでさかのぼっている。よって、二つめの見解も成立しない。以上より、袋とじ本として装丁されていたものを、一度解体した際にこの書き込みがなされたとする三つ目の見解が妥当であるということが出来る。

また、この1446年に修補されたと考え得るものに、試料No. 5（巻七）（暦年代：1438(1473)1525, 1557()1632 [calAD]）が挙げられる。試料No. 5の区分としては、試料No. 2, 4とともにⅢとなるが、その確率分布はこの二点と異なっている。この点から考えると、区分Ⅲは二回分の修補年代（試料No. 5の15世紀後半と、試料No. 2, 4の17世紀前半）から成っている可能性もある。

<『今昔物語集』「鈴鹿本」巻九と巻二十七の綴じ糸の年代値から>

前々項においては、巻九（上）（下隅）の綴じ糸の年代値から「鈴鹿本」書写年代の推定を行うことができた。また、前項においては、「鈴鹿本」の修補が少なくとも三回行われたこと、ならびに、各巻がばらばらに保管されていた可能性があることを示した。ここで、綴じ糸の年代値を各巻ごとにみてもみると、巻九と他の巻の間に大きな違いがある。巻九の綴じ糸の年代が、いずれも13世紀以前であるのに対して、他の

巻の綴じ糸の年代値は、すべて15世紀後半以降を指している。これは、巻九が14世紀以降、その綴じ糸に修補が必要となるほどには世の中で読まれていなかったことを示している。これに対して、他の巻は、15世紀後半以降、その綴じ糸に修補が必要となる程度には読まれていたことがうかがえる。

『今昔物語集』は成立後、あまり世間に流布せず、どこかの秘庫にでも保管されていたといわれている（馬淵 1948：長野 1962）。これは従来、「鈴鹿本」に蠹損が相当あること、記録典類に『今昔物語集』の名がみられないこと、語りの結句「トヤ」が同時代の他の説話集にみられないこと、そして、未定稿本として「成立」したことといった文献史的な情報を根拠に論じられていたが、巻九の綴じ糸が13世紀以来、現在まで修補されないままであったという¹⁴C年代の情報によっても指示されるものとなった。

しかしながら、成立後広く流布しなかったという状況は全巻にわたっていえることである。巻九が鎌倉末期の修補を最後とし、巻五・七が戦国時代の修補を最後とするのに対して、巻二・二十七が江戸時代にも修補が行われている。この各巻の間に生じる差の原因として、江戸時代の国学者の態度が考えられる。伴信友は天保十五年（1844年）二度目の「鈴鹿本」との遭遇に際して、「追記」の中で以下のように述べている。これは、先においても記したものであるが、ここでも再度取り上げる。

サテ又鈴鹿氏此外ニ天竺震旦ノ部若干卷蔵リト聞タレド
モトヨリ其本書ヲダニ省キテ写シ持タザレバ借リテモ見ズ

これをみる限り、自身の『今昔物語集』写本に天竺・震旦の部がなかったため、借りず、それが故に冊数も不明であったととることもできる。しかしながら、長沢伴雄写本に書写されている信友写本の奥書において、信友は次のように述べている、

今昔物語集欠 巻以或所秘蔵校本課人令書写他日以二本及印
本校之天竺部震旦部共不足読故借不写矣
天保二年五月 伴信友

これより、明らかに信友は天竺震旦の部に本朝の部よりも低い評価を下していることがわかる。世間に広く流布しなかった『今昔物語集』が、江戸時代に入って信友ら国学者の注目を浴びるにいたるが、それは主に本朝の部であったようである。この観点からみると、巻九（震旦、因果応報）、巻五（天竺、因果応報）、巻七（震旦、経典）が、江戸時代に修補されなかったことに合点がゆく。なお、江戸時代に修補された巻二十七は、本朝部で霊鬼（霊・鬼・狐）に関するものであり、巻二は、天竺の部であるが釈迦の説法の記されたものである。

5. おわりに

本研究では、『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸の¹⁴C年代測定を行い、「鈴鹿本」の書写年代、およびその修補についての情報を得ることができた。

歴史時代の微量の試料（貴重な試料）を測定する点において、加速器質量分析計による¹⁴C年代測定法は有効である。しかし、現段階において加速器質量分析法では、資料の暦年代は一世紀近い誤差範囲をもつ値でしか決定できない。一世紀という時間は、人間一世代分よりも長い時間である。特定一個人の行為・行動が問題とされることの多い歴史時代において、この一世紀という誤差は極めて大きなものである。現在の¹⁴C年代決定法によって暦年代を誤差なしで断言することはできない。しかしながら、文献史学の情報によって、誤差ある¹⁴C年代に制限を加えることが可能であり、また、誤差ある¹⁴C年代値の前後関係と文献史学的見解をあわせ用いることによって、資料に関するある種の情報を導き出すこともできる。こういった点から、今後、歴史時代の試料の¹⁴C年代測定は、文献史学との相補的な関係の中において、歴史学の有効な一手段となることが期待される。

謝辞

本研究において用いた『今昔物語集』「鈴鹿本」綴じ糸は、京都大学附属図書館の吉岡千里氏の御好意により提供していただいた資料である。ここに厚く感謝の意を表します。名古屋大学年代測定資料研究センターの太田友子氏ならびに池田晃子氏には、年代測定のための試料調製について御指導していただいた。ここに深く感謝します。

参考文献

- 平林盛得. 1978 “今昔物語集原本の東大寺存在説について.” 日本歴史 356, 1-19.
今野達. 1958 “今昔物語集の作者を廻って.” 国語と国文学 35(2) (日本文学研究資料刊行会 1970 『日本文学資料叢書 今昔物語集』 有精堂, 82-91.)
馬淵和夫. 1948 “今昔物語集における欠文の研究.” 国語国文 17(8), 15-31&43.
馬淵和夫. 1951 “今昔物語集伝本考.” 国語国文 20(5), 31-40.
長野菅一. 1962 “今昔物語集「奈良本」について.” 国語と国文学 39(10), 48-57.
Pearson, G. W. and Stuiver, M. 1993 “High-precision bidecadal calibration of the radiocarbon time scale, 500-2500BC.” Radiocarbon 35(1), 25-33.
酒井憲二. 1975 “伴信友の鈴鹿本今昔物語集研究に導かれて.” 国語国文 44(10) 23-30.

Stuiver, M. and Pearson, G. W. 1993 "High-precision bidecadal calibration of the radiocarbon time scale, AD1950-500BC and 2500-6000BC." Radiocarbon 35(1), 1-23.

田口和夫. 1978 "今昔物語集「鈴鹿本」興福寺内書写のこと." 説話 6, 21-36.

橘健二. 1961 "今昔物語集成立時「保安元年以後説」についての一傍証."

国語国文 30(5) (日本文学研究資料刊行会 1970 『日本文学研究資料叢書
今昔物語集』 有精堂, 92-101)

¹⁴C Age Measurement of

Konjyakumonogatarisyu "Suzukabon" with Tandetron AMS.

Hiroataka ODA¹⁾, Toshio NAKAMURA²⁾ and Michiaki FURUKAWA¹⁾

¹⁾ Department of Chemistry, School of Science, Nagoya University

²⁾ Dating and Materials Research Center, Nagoya University

The use of AMS has made it possible to obtain the ¹⁴C-age of ancient documents, *Konjyakumonogatarisyu* "Suzukabon", by measuring paper strings used to bind the documents. The "Suzukabon" is the oldest edition copied by hand in the extant *Konjyakumonogatarisyu*.

Results of ¹⁴C-age measurements have brought us important information about the age when the "Suzukabon" had been drawn (copied) and repaired. It has been commonly accepted that the documents had been copied in the latter half of thirteenth century. In this study, however, ¹⁴C-age of one string has indicated that one volume of the documents had been copied a century before the accepted age, i. e., in the middle-twelfth century. It has also been suggested that the "Suzukabon" may be one of the original rather than a copied version of *Konjyakumonogatarisyu*. In addition, we obtained evidence that the "Suzukabon" had been repaired at least three times from ¹⁴C-ages of the strings.

小田寛貴, 米延仁志, 太田友子, 池田晃子, 中村俊夫, 吉沢康和, 古川路明
 ”文化財資料の加速器法による¹⁴C年代測定.”

日本文化財科学会 第11回大会, 昭和女子大学, 1994年6月.

大学院博士課程前期修了論文

小田寛貴 (名古屋大学大学院理学研究科化学専攻)

”加速器質量分析法による文化財資料の¹⁴C年代測定 — 問題点とその克服 — ”

出科立同素炭のくや×中炭大

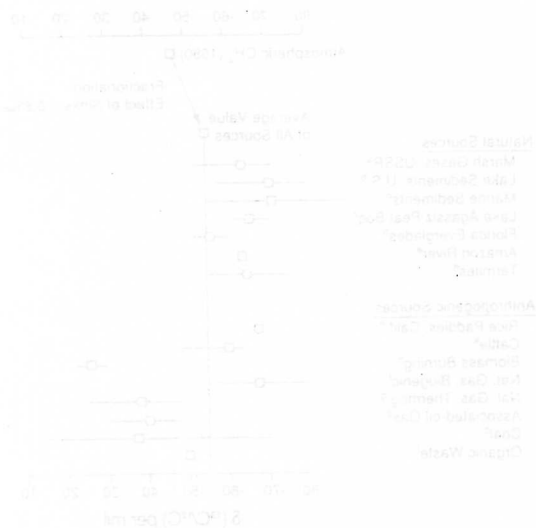


Fig. 1 The measured $\delta^{13}\text{C}$ values of sources of atmospheric methane. The open squares are the mean values of individual measurements over the indicated range (Stevens and Engelkemeier, 1982)

この測定は、加速器質量分析法による¹⁴C年代測定に不可欠なものである。加速器質量分析法は、試料中の¹⁴Cと¹²Cの比率を高精度で測定し、これを標準試料と比較することで年代を推定する。本研究では、文化財資料の¹⁴C年代測定に際して、試料中の¹⁴C濃度を正確に測定し、その変動要因を明らかにすることを目的とした。結果として、加速器質量分析法の適用範囲を拡大し、より多くの文化財資料の年代測定が可能となった。